

江戸楽

edo-gaku

2025年9月号より抜粋



SENJU JUKU
400th
since 1625

足立区・千住に息づく歴史と美術

千住宿
開宿四〇〇年

CONTENTS

- 江戸の繁栄を支えた千住宿
- 千住×江戸 宿場が生んだ文化交流
- 千住に花開いた美術

TOPIC 足立区が取り組む文化遺産調査

TOPIC 美術修復に携わって

- 歩いてみよう千住宿

千住大橋／伊豆の長八／北斎と千住／出会いと別れの地／
やっちゃ場／千住の酒合戦／モザイクの町／宿場の中心部／
地名の由来／横山家住宅／千住絵馬屋／骨接ぎの名倉／槍掛けの松の碑

- 千住宿マップ

- 千住宿瓦版

足立区立郷土博物館 “美術博物館”としてリニューアル
街の風景を残したい——。古民家をリノベーション



千住の街なかで、気軽に休憩ができたり、街の情報を集めたりすることができるお休み処です。散策に便利なお散歩マップやイベントのパンフレットなどを用意して皆さまのお越しをお待ちしています。



観光案内所 お休み処 千住街の駅

営業時間 9:00～17:00 (1月1日～3日は10:00～16:00)

定休日 火曜日(火曜日が祝日の場合と1月1日～3日は開館)、年末(12月29日～31日)

東京都足立区千住3-69(宿場町通り) 北千住駅西口から徒歩5分

TEL 080-6630-8037 E-mail info@kanko-adachi.jp <https://www.adachikanko.net/about/tourist>



足立区立郷土博物館の展示室に置かれた1800～30年代の千住宿の模型。茅葺(かやぶき)の農家風の建物と、板葺(いたぶき)・瓦葺(かわらぶき)の町屋風の建物が混在しているのが特徴

千住宿 開宿400年

足立区・千住に息づく歴史と美術

日本橋を出立し、日光街道・奥州街道の初めての宿場「初宿」にあたるのが千住宿だ。千住の発展は文禄3年(1594)に「千住大橋」が当時の荒川に架橋されたことから始まり、寛永2年(1625)には宿場が開かれた。河川と街道は陸運・舟運の発達をもたらし、宿場は繁栄。経済力をつけた千住の旦那衆は、江戸市中の文人たちと親交を深めた。それらを物語る美術品や古文書が、今も旧家や博物館で大切に使用・保管されている。今、千住は再開発が進み、町並みも新たな表情を見せている。本特集では千住宿開宿400年を振り返り、千住宿に残る美術品や建物、歴史を伝える人々の営みを紹介。この誌面を記憶の「保管庫」として、次代へその価値を伝えていきたい。

〈参考文献〉足立区立郷土博物館の図録「大千住 美の系譜」、「谷文晁と二人の文」、「美と知性の宝庫 足立一酒井抱一・谷文晁とその弟子たち」、「名家のかがやき」、「琳派の花園 あだち」、足立史談会「足立区史跡散歩」(学生社)、横山吉男「日光街道を歩く―江戸の史跡を訪ねて」(東京新聞出版局)

江戸の繁栄を支えた千住宿

東京都足立区にある「北千住駅」の西側が、かつての千住宿の中心部にあたる。宿場が開かれてから四〇〇年経った今でも、交通至便なエリアとして繁栄を見せる千住。その成り立ちについて、足立区立郷土博物館の多田文夫さんに話を聞いた。

なぜ千住に宿場が置かれたのですか？

千住大橋が架けられ、交通の便が良くなったからです。

A



江戸時代以前の足立区は、小さな集落が点在する以外はほとんどが未開発地で、荒川・江戸川水系の河川に囲まれた草原でした。新田開発は徳川家康の入府の直後から始まり、代官・伊奈忠治(徳川家の家臣・伊奈忠次の次男)が主導して進められ、稲作が盛んになりました。

千住が発展する大きな契機となったのが、千住大橋の架橋です。こちらは文禄三年(一五九四)、徳川家康の命を受けた伊奈忠次が奉行となって建設されました。

た。伊達政宗が橋の部材を寄進したという伝説があります。が、史実として記録に残るのは正保年間(一六四四～四八)の改修時に行われた伊達家を含めた東北諸大名の御手伝普請(幕府が諸大名に命令して行わせた土木工事)です。

千住大橋は、当時の「荒川」に架けられた最初の橋であつたために完成当初は「大橋」と呼ばれ、他の橋ができると「千住大橋」となりました。ちなみに、現在の荒川は昭和初期に完成した人工的な「荒川放水路」のことで、現在の隅田川が当時の荒川でした(上図)。

大橋が架けられたことで陸上交通が便利になり、寛永二年(一六二五)に千住宿が開かれます。千住宿は日本橋を出て日光街道・奥州街道の初めての宿場として繁栄し、江戸四宿(品川、新宿、板橋、千住)の中では最大の人口を誇るまでになりました。日光街道・奥州街道は江戸と日光東照宮を結ぶ重要な道であり、将軍もしばしば通りました。

足立区立郷土博物館 学芸員
多田文夫 さん



千住宿はどのようなように
繁栄していったのですか？

水陸の交通の便を活かし、
多くの人や物資が
行き交う事で繁栄しました。

千住宿の機能は、他の宿場と同様に、物流・宿泊・書状伝達の三点です。物流は「人馬継立」というリレー方式で、次の宿場まで人や荷物を運んで引き渡すものです。宿場町の人々は幕府の公用については人足や馬と宿泊所の用意を命じられました。その負担の代わりに、土地の税金が免除されたり、公用の荷物以外は有料の運送業を行うことを認可されたりするなどのメリットも享受していたのです。

千住宿は陸上交通だけでなく河川の荷揚げ場としても栄え、ここで取引された米、材木、紙など、様々な物資が江戸をはじめ各地で卸売られました。江戸に近かったため、産物を直接消費地に出荷できる地の利があったことも特徴です。交通の要衝となったことから、千住には自然発

生的に「やっちゃば」（野菜を扱う青物市場）もできました。なお、今日ブランド葱として知られる「千住葱」は品種名ではなく、「千住の葱問屋が目利きした葱」という意味で、有名になるのは肉鍋に入れるようになった明治時代に入ってからです。



千住宿伝馬割図(せんじゅじゅくてんまわりず)。享保末期(1730年代)の千住宿の伝馬役(輸送費の負担)の分担を記した図(足立区立郷土博物館所蔵・福島家文書)



千住の問屋が江戸城御用の青果の荷物に付けた木札「御用札」(江戸時代後期、足立区立郷土博物館所蔵。福島家資料)

現在、北千住駅の一日あたり乗降客数は約一六〇万人で、世界六位。「住みたい街」のランキングなどでも注目を集め、五つの大学キャンパスを有する学園都市にもなっています。この発展にはやはり江戸時代か

らの千住宿と日光街道の存在が影響していると思います。物流ルートがあれば、そこに鉄道が通り、ターミナルになっていくからです。近代になってからは、常磐線は常磐炭鉱(茨城県)と東京を結ぶ路線として、東武

千住宿の繁栄を
伝えるものがあれば教えて下さい。

交通の要衝であることや、
江戸の文人たちとの
交流の記録などです。

線は桐生(群馬県)から織物を出荷するために敷かれました。財力のある千住宿の旦那衆が江戸の文人の芸術活動を支え、その作品が今も旧家や受け継いだ博物館に残されているという点も、千住宿の大きな特徴です。日本橋から約二里(約八キロ)、徒歩で二時間。江戸時代の人にとっては行き来しやすい距離だったのでしょう。東京の他の宿場町に比べると市街地開発が遅かった千住宿ですが、それでも変化しています。宿場町としての面影は数軒の建物を除けば薄れつつありますが、街道沿いに江戸時代か



江戸末期の千住大橋を描いた錦絵。橋本貞秀「日光御街道 千住宿 日本無類楠橋杭之風景 本願寺行粧之図」(足立区立郷土博物館所蔵)

らの屋敷が今も残るのは、江戸四宿の中で千住宿のみ。そして、街道の道幅、短冊状に細長い地割、小さな路地などにも、昔の記憶をたどることが出来ます。千住の人たちは千住愛が強いですね。歴史を伝える活動が手弁当で活発に行われています。旧家の方々は空襲や建物の建て替えといった試練を乗り越えながらも、建物、美術品、古文書を受け継いでこられました。こうした地域の皆さんの熱い思いが、千住宿開宿四百年を盛り上げる原動力となっていると思います。

千住×江戸宿場が生んだ文化交流

千住宿には、豊かな経済力を誇る千住の旦那衆と江戸市中の文人たちが活発に交流していた記録が数多く残っている。とりわけ江戸の琳派や谷派の絵師たちの活躍が際立つ。足立区立郷土博物館の小林優さんに、その錚々たる顔ぶれを紹介していただく。

「千住の酒合戦」は文化イベントだった

江戸時代、俳諧や狂歌、茶事などの嗜みは人々の共通の娯楽であり、日々の暮らしの中で、書画や文芸は現代の私たちが思うよりずっと身近なものでした。このような中で、千住では宿場町としての発展を背景として、問屋の主人たちを中心にそのような書画文芸を楽しむ文化が育まれました。さらに、著名な文人が多く暮らす下谷と隅田川を挟んで近接するという地理的な特徴が、千住と江戸市中の文人の活発な交流を可能にする要因となったのです。

千住と江戸市中の文人たちとの交流が始まるきっかけとなったのが、俳人・絵師の建部巢兆の存在です。日本橋に生まれ、千住の藤沢家の養子となって移住した巢兆は、江戸の文人たちとも親しく、この巢兆を通じて、千住の人々と江戸の俳人や絵師との交流が広がっていきました。

江戸市中の文人たちと、千住の人々の交流として有名なものが「千住の酒合戦」でしょう。一八一五年、千住の飛脚問屋、中屋六右衛門の還暦祝いの余興として開催されました。近隣の酒豪を集めて酒の飲み競べを行い、見物人として酒井抱一、谷文晁、亀田鵬斎からも招かれました。会の後

には文晁たちが酒合戦の様子を記録した絵巻物が作られ、二年後に行われた第二回の酒合戦で披露されます。さらに、第二回酒合戦では書画の展覧会も一緒に行われる他、抱一たちが下絵を手掛けた盃が用意されるなど、酒合戦は文人たちが技を振るい、様々な書画工芸品を生み出す文化的なイベントでもあったのです。

—— 琳派とは？ ——

17世紀、京において俵屋宗達や本阿弥光悦から始まった日本美術の流派。18世紀に宗達の絵に憧れた尾形光琳が大成させた。19世紀、光琳の絵に憧れて江戸で琳派の画風を確立したのが酒井抱一。宗達から抱一までは直接の師弟関係は無い。金や銀を用いた装飾的な画風や、墨や絵の具のにじみを活かして独特な紋様を表現する「たらし込み」と呼ばれる技法が特徴。



建部巢兆編『はいかい小かさばら』（はいかいおがさわら）。千住連をはじめ全国各地の俳人たちの俳句が掲載されている（足立区立郷土博物館所蔵）



足立区立郷土博物館 学芸員
小林 優 さん

千住連

千住と江戸市中をつないだ立役者

たけべ そうちよう
建部巢兆

1761 ~ 1814

俳人、絵師。日本橋で生まれ育ち、寛政(1789 ~ 1801)頃に千住の藤沢家の養子になる。のちに風光明媚な関屋の里(現在の千住関屋町 ~ 墨田区堤通二丁目付近)に「秋香庵」という庵を構え、俳諧グループ「千住連」を率いた。「千住連」には現在の千住河原町(足立市場近く)の商家の主人をはじめ近隣の人々が参加した。

弟子

さかがわ や り い ん
坂川屋鯉隠

1785 ~ 1854

千住河原町の青物問屋の主人。第1回千住の酒合戦で世話人を務めた。

千住宿の主な文人 相関図

凡例

- 下谷の文人
- 血縁
- 師弟関係

むらこし こうえい
村越向栄

1840 ~ 1914

東耕堂を受け継ぎ、明治になると東耕堂は「私立村越小学」となっており、向栄は初代校長となった。画家としても活躍し、千住の人々の依頼に応じて琳派の作品を描き続けた。

琳派

江戸の琳派を確立した絵師

さかい ほういつ
酒井抱一

1761 ~ 1828

姫路藩主・酒井忠以の弟で、江戸で琳派の画風を確立した絵師。建部巢兆と親しく、下谷(上野のお山の下、東側一帯)に住み、同じく下谷に住む絵師の谷文晁や儒学者の亀田鵬斎と共に千住に通う。

弟子

すず き き い つ
鈴木其一

1795・96 ~ 1858

酒井抱一の弟子。抱一に厚く信頼された門下随一の实力者。千住の文人との共作を多く残す。

弟子

千住の琳派絵師

むらこし き えい
村越其栄

1808 ~ 1867

下谷に住んでいたが、1840年に千住で寺子屋「東耕堂」を開き、以降は千住を拠点とする。鈴木其一に絵を学び、琳派絵師として活躍。其栄の作品は千住河原町の稲荷神社や千住の旧家に伝来している。

子

谷派

多くの門人を抱えた谷派の始祖

たに ぶんちよう
谷文晁

1763 ~ 1840

江戸時代後期の江戸画壇を代表する絵師。はじめ狩野派の画法を学び、以後、中国の南宗・北宗画、西洋画等の諸画派を研究して、様々な画法を自在に使いこなした。坂川屋鯉隠や関屋里元といった千住の文人と親交を重ねる。

娘婿

いっせい たにぶんいち
一世 谷文一

1787 ~ 1818

「千住の酒合戦」の模様を文晁と合作で「高陽関飲図巻」に描いている。32歳で早世。

弟子

子

ふなつ ぶんえん
船津文潤

1806 ~ 1856

現在の足立区江北地域の豪農。文晁門下の絵師としても活動。

に せい たにぶんいち
二世 谷文一

1814 ~ 1877

「二世文一」を名乗って絵師として活躍。後に宮津藩(現・京都府宮津市)に仕える。

かめ だ ほうさい
亀田鵬斎

1752 ~ 1826

儒学者。酒井抱一、谷文晁、大田南畝らと交友。建部巢兆は義理の兄弟。

せき や り げん
関屋里元

1792 ~ 1831

千住の商家の人で、狂歌師。茶や絵画にも詳しい。

武蔵野美術大学 教授

玉蟲敏子 さん

特に「琳派」をはじめとする中世～近世美術を研究。主な著書に『酒井抱一筆 夏秋草図屏風 追憶の銀色』（平凡社／第16回サントリー学芸賞）、『都市のなかの絵 酒井抱一の絵事とその遺響』（ブリュッケ／第16回国華賞）、『生きつづける光琳 イメージと言説をはこぶ（乗り物）とその軌跡』（吉川弘文館）、『俵屋宗達 金銀の（かざり）の系譜』（東京大学出版会／第63回芸術選奨文部科学大臣賞）。



人々の暮らしの中で 愛されてきた美術

私は長年、琳派の流れを研究してきました。琳派の本場は京都で、絢爛なイメージがありますが、酒井抱一などが描く江戸の琳派の画風は寂寥としていて、その世界に惹かれたのです。二〇〇九年、千住の旧家に所蔵されていた屏風が、村越向栄作「十二カ月花卉図屏風」である

と判明しました。そのことを足立区立郷土博物館専門員であり、現在は川村学園女子大学教授を務める眞田尊光さんからお知らせを受けて知り、「千住」と「琳派」という意外な組み合わせに興味深く感じたのが、私が足立区の美術資料調査に携わるようになったきっかけです。その後も千住や足立区内の旧家から続々と作品が出てきました。都内でこれほど琳派の作品がまとまって出現したことは、これまで聞いたことがありません。

千住の美術の特徴は、屏風や掛け軸が町の人々の日常生活で活用され、身近な存在であった点です。旧家では季節の移ろいや行事に合わせて、月ごとに床の間の掛け軸を替えていました。従来の美術史研究は作品の内容や作者が主なテーマでしたが、千住の美術のように作品の伝来や使われ方が明らかになることで、美術史、歴史、民俗学といった多様な分野からも地域の文化遺産の新たな価値を見出せる可能性が広がると思います。

千住に花開いた美術

千住宿の人々の生活に寄り添い、時を超えて愛されてきた美術品たち。その魅力を、足立区の文化遺産調査に携わってきた武蔵野美術大学教授の玉蟲敏子さんの解説とともに見ていこう。



村越其栄 「秋草図屏風」

千住河原町 稻荷神社所蔵

青物問屋が集まる千住河原町の稲荷神社に伝来する屏風で、向日葵、朝顔、藤袴、菊、桔梗など晩夏から秋の季語となる様々な草花が描かれています。江戸琳派の酒井抱一や鈴木其一が緻密な画風を得意とする一方で、千住に根差した村越其栄は自然美をおおらかに描いており、「江戸の琳派の末裔」ではなく「千住の琳派の始祖」と呼ぶにふさわしい画家です。

部分を拡大



建部巢光

「吉野山桜 竜田川紅葉図屏風」

足立区立郷土博物館所蔵

江戸時代から続く接骨医・整形外科医の名倉家に伝来していた屏風で、右隻に桜の吉野山、左隻に紅葉の竜田川を配置した名所風俗図です。六曲一双（六つ折りで二隻一組の対になっている形）、一隻の長さは366cmと大きく、稲穂を担ぐ里人や、桜の花びらが茅葺き屋根に舞い散る様子が描かれ、のどかな山里の暮らしの情景が浮かび上がります。



左隻



右隻

※絵の画像提供はすべて足立区立郷土博物館



村越向栄

「八橋図屏風」

個人蔵（足立区立郷土博物館寄託）

村越其栄の息子・向栄による明治時代の作品です。「燕子花と八橋」の組み合わせは『伊勢物語』にちなむもので、琳派の先達たちによって描き継がれてきた画題です。

京都の琳派が絢爛にして豪華な金箔地を多用するのに対して、江戸の琳派は寂寥を感じさせる銀箔地を好んで使っており、こちらも銀箔地を背景としています。この屏風は千住宿の薬問屋・若田家に受け継がれてきました。向栄の屏風や掛け軸は、千住の旧家で年中行事や冠婚葬祭の場で実際に使用され、暮らしの中で大切にされてきたのです。

文化12年(1815)に行われた1回目の「千住の酒合戦」に招かれた文人たちが、会の様子を書画で記録した合作です。谷文晁が題字を、亀田鵬斎が漢文序を、酒井抱一が「会場入口図」を、大田南畝が会の詳細を文章で寄せました。谷文晁・文一親子が描いたのがこちらの「酒戦図」(部分)。第2回の酒合戦と同時に開催された書画の展覧会で披露され、多くの異本・写本が作られました。本作はその一点です。



部分を拡大

「高陽闘飲図卷」より
「酒戦図」

個人蔵

「筑波山に都鳥
墨切蒔絵大盃」

酒井抱一

個人蔵



千住仲町の旧家に伝来する、口径 47.3cm の大きな盃で、文化14年(1817)、第2回の「千住の酒合戦」で使用されました。酒井抱一が下絵を描き、蒔絵師の原羊遊斎が蒔絵を施したもので、水墨画風の「墨切」の技法(漆で描いた図に、金粉ではなく墨の粉などを蒔いて研ぎ出す技法)が使われています。筑波山や都鳥は抱一好みのモチーフ。付属の箱の表には大田南畝による「都鳥」の文字が、裏面には谷文晁による酒にまつわる内容の俳句が記されています。



足立区立郷土博物館で開催された「千住・足立の文化遺産展(前期) 香りたつ琳派の美」(2025年4月26日～6月29日)で展示された大盃

村越向栄
「四季草花図 屏風」の
修復過程



修復前



修復後



修復前は経年変化による骨組子の形のヤケが目立つ。作品を屏風から取り外して洗浄し、純水を使って汚れを丁寧に除去。また、紙の劣化が進行していたため、炭酸水に胡粉を混ぜた溶液の上澄みを塗布し、紙の酸性を抑制し耐久性を高めた



右／勝村英世さん(奥)と真光さん 左／英世さん自身も建部巢光をはじめとする千住ゆかりの文人の作品を収集。2006年には「千住の酒合戦」を再現するイベントを中心となって企画するなど、地域活性化に尽力してきた



次代へ残したい
地域の文化資源

足立区の文化遺産調査事業の一環として、美術品の修復が行われている。大正五年(一九一六)

TOPIC

美術修復に携わって

創業、古美術の表装・修復を行う「装雅堂」(千住仲町)の三代目の勝村英世さんと息子の真光さんを訪ねた。装雅堂は古美術店やコレクターなどからの仕事を受け、これまでも画家の中村不折や横山大観などをはじめ数々の美術品の修復を手掛けてきた。化学糊を使う同業者が多い中、装雅堂では小麦澱粉を自社で炊いた「生麩糊」を用いている。「掛け軸や屏風は飾られることで空気に触れ、生き物のよう

に呼吸をします。化学糊には貼りやすいという利点がありますが、呼吸を妨げるため長く持たないのです」と英世さん。真光さんは「表具の材料(裂地・和紙・骨組子・漆塗・金物類)を製造する方々が近年次々と引退や廃業されており、材料の入手が困難になっています。厳しい状況下でも、できるだけ多くの作品を修復し、地域の文化資源を後世に残せるよう力を尽くしたい」と話す。

旧家から続々と
寄せられる調査依頼

「二〇〇九年、足立区立郷土博物館に一本の電話がかかってきました。千住宿の旧家の方からの依頼で、『家にある屏風を見てほしい』と。当時の学芸員が訪問したところ、琳派の絵師による見事な屏風を見せていただき、『なぜ琳派の作品がここに?』と、訪ねた学芸員たちが大変驚いたと聞いています」と話すのは、前出の足立区立郷土博物館学芸員・小林優さん。足立区ではこの出会いも後押しして、二〇一二年に区制八〇周年を迎えるのを契機に、美術資料も含めた文化遺産調査を開始した。その後、様々な家から調査の依頼や美術資料の寄贈があり、



『國華』
第1531号
(國華社)
2023年
5月20日発行、
5,500円

博物館は三千点以上もの美術品を収蔵することに。「玉蟲敏子先生をはじめ研究者の皆様のご協力のもと、調査を通じて足立区の豊かな文化とその立役者たちの存在が明らかになりました」と振り返る。

今現在も続く調査の成果は企画展を通じて公開されている。

特筆すべきは、二〇二三年、思想家で美術指導者の岡倉天心らが明治時代に創刊した美術雑誌『國華』に「千住・足立の文化遺産」として特集が組まれたことだ。『國華』は刊行が継続している美術雑誌としては世界最古で、日本で最も権威あるとされる美術雑誌。「これまで市区町村単位で地域に伝来する絵画や工芸品を集めた例はなく、足立区にとって誇るべき出来事となりました。近年注目されている『地域美術史』という概念の重要性を発信できたという点でも、意義深いと考えます」



2014年、旧家の蔵での調査風景



1942年、千住の旧家。後ろに写る床の間に村越向栄の作品が掛けられている。千住の人々は日常の暮らしの中で美術に親しんできた



葛飾北斎「富嶽三十六景 武州千住」（足立区立郷土博物館所蔵）



「葛西屋」があったことを示す立て札。その下の「千住QR観光ガイド」は歴史散策スポットに設置されているもので、QRコードを読み取れば動画でガイドを受けられる

やっちゃ場（青物市場）は千住河原町、現在の足立市場のあたりから日光街道沿いに続いていて、昭和初期まで存在していました。昔の建物の多くは失われてしまったので、青物問屋があったところにはその屋号を示す立て札が立てられています。その一つ、「葛西屋」があった場所（写真）には、やっちゃ場があった当時の石畳が今も残されています。他にも街道の道幅や短冊型の細長い屋敷割など、建物が失われても地べたは変わっていないことに、宿場の面影を感じることができます。

やっちゃ場

5

千住の酒合戦

源長寺（足立区千住仲町4-1）は慶長15年（1610）創建

源長寺は第2回の「千住の酒合戦」の会場となったお寺です。千住の新田開発を行った石出掃部亮吉胤が慶長15年（1610）に創建。墓所もこちらにあります。仲町、河原町、橋戸町一帯を「掃部宿」と言いましたが、千住一〜五丁目の千住宿の規模が拡大するに伴って千住宿に加わり、その一部となりました。

北斎と千住

3

北斎は『富嶽三十六景』の内、なんと3枚も千住を描いています。北斎は人間の身体の動きを描くために骨格の構造を学ぼうと、骨接ぎで名を馳せた千住の名倉家に通っていたので、千住は馴染みの地だったのでしょう。生涯93回も引越したと言われる人ですから、千住に暮らしていた可能性もありますね。千住大橋のたもとをはじめ区内には3カ所、北斎の顕彰碑が存在します。千住は富士浅間神社を信仰する「富士講」が盛んで、現在でも足立区内には9つの富士塚が確認されています。富士山が描かれた錦絵は、きっと有り難がられたことなのでしょう。千住は江戸の北の玄関口ですから、錦絵が江戸土産として販売されたことも考えられます。

出会いと別れの地

4



東京都中央卸売市場 足立市場（足立区千住橋戸町50）の一角に、芭蕉像が建てられている

深川の庵を出発した松尾芭蕉は、船で隅田川を上って千住の川湊で上陸し、ここから日光街道・奥州街道を往く『おくのほそ道』の旅が始まりました。旅の準備をしたり、餞別を持って訪ねてくる知人の対応をしたりと、千住には数日滞在したと思われる。伊能忠敬もここから測量の旅に出発しています。

近年は千住の風景の中に、宿場の面影を見つけるのが難しくなっています。そこで私は「物語観光」(※)の魅力を多くの人に伝えたいと思っています。千住宿には数多くの伝説や物語が残っているんですよ。まずは千住の町の生みの親、千住大橋に行ってみましょう。

※伝説や物語の世界観を体験する観光

1

千住大橋



NPO 法人
千住文化普及会 理事長
櫻原文夫 さん

千住で長年蕎麦店を営み、2006年には郷土文化を次世代へ伝承することを目的に「NPO 法人千住文化普及会」の設立に携わる。千住文化普及会は講演会の開催、「千住街歩きガイド」の実施、観光案内所「千住街の駅」の運営受託など、多岐にわたる活動を展開している

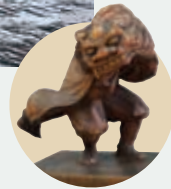
私が千住の歴史に関心を寄せるようになったきっかけは、千住大橋の部材で作られた彫刻が家にあったことです。子ども時分、その価値が分からずにボールの的にして遊んでいたが、じいさんにしこたま叱られました。その時から、地域の人たちが千住の歴史を大切にしていることを実感したんです。この彫刻は明治18年（1885）に流された橋杭の木材を使って地元の彫刻家・富岡芳堂が制作したもので、地元の人々に頒布され現在計22体が旧家に残っています。

地元では、千住大橋の最初の橋の杭は伊達政宗が寄進した「高野槇」であるという伝説が語り継がれてきました。古川柳にも「伽羅よりも勝る千住の槇の杭」とあり、これは「香木の伽羅を使った下駄を履いて吉原で放蕩した仙台藩三代藩主よりも、橋の杭を寄進した初代の政宗の方が立派だ」ということを表しています。

また、地元では江戸時代の橋杭が川底に残っているとされてきました。私もある時、古老の船頭から「潮が引くと杭に当たって船が傾く」と聞いて、夏になったら飛び込んで確かめてみようと考えましたが、みんなに止められました（笑）。そして2003年に東京都建設局河川部が調査を行い、3本の高野槇の木杭がいまだに眠っていることが確認されました。歴史ロマンを掻き立てられますね。杭がある場所に目印としてブイを浮かべていますので、橋の下をぜひ覗いてみてください。



右／千住大橋の杭で作られた獅子舞の彫刻（櫻原さん所蔵）上／隅田川に浮かぶブイ。橋杭が眠る場所を示している



伊豆の長八

2



鍔絵は年に3回（2/3、5/15、9月中旬の例祭日）のみ公開。非公開日はレプリカが拝殿前に置かれている

伊豆の松崎出身、有名な左官の名工・入江長八の鍔絵（漆喰で作られるレリーフ）が、千住大橋近くの橋戸稲荷神社（足立区千住橋戸町25-1）の本殿の扉の裏に残されています。千住の船主が長八に作らせ、航行安全を祈って神社に寄進したもので、舟運で栄えた千住の町を物語るものです。

ここからは宿場町の面影を訪ねて、千住宿を歩いてみよう。
生まれも育ちも千住の櫻原文夫さんにご案内いただいた。

歩いてみよう千住宿



商店街に掲げられた
地口行灯

11 千住絵馬屋

江戸時代から代々、絵馬や地口行灯などを描いてきた吉田家の店舗(足立区千住4-15-8)です。「地口」とはダジャレの一種で、滑稽な絵を添えて行灯に仕立てたのが地口行灯。祭礼の時に奉納されるものですが、今は旧日光街道沿いの商店街の店先にも掲げてあり、千住の町を彩っています。

手書きで絵馬を作る店は、今では都内では稀少な存在



千住宿の北で、日光街道・奥州街道から分岐して水戸街道が始まります。清亮寺(足立区日ノ出町42-1)の立派な老松が水戸街道の上に覆いかぶさっていたため、ある時、水戸藩の徳川光圀の行列の槍持の槍にぶつかりそうになりました。普通の大名ならば行列の邪魔だからと松を切らせてしまうところ、光圀は槍を松の幹に立てかけさせ、お供の者たちと一緒にこの老松を眺めながら一服したそうです。光圀の風雅を解した采配が語り継がれて、老松は「槍掛けの松」と呼ばれるようになりました(松は1945年頃に枯れ、現在は無い)。



清亮寺に建つ槍掛けの松の
いわれを伝える石碑

13

槍掛けの松の碑

千住歩きはいかがでしたか。千住宿のスゴイところは、歴史があるだけでなく、江戸から令和の現在まで、いつの時代にもぎやかなことです。にぎわいが他所へ移ることが無い、不思議な磁力のある町だと思います。



名倉医院の長屋門は嘉永元年(1848)に建造



骨接ぎの名倉 12

江戸時代中期に接骨医を開業。「骨接ぎ」といえば名倉と言われるほど、関東一円に有名となった医院(足立区千住5-22-1)です。将軍家御成のために造った母屋や、長屋門が現存しています。当主は代々文芸を嗜み、文人たちとの交流も盛んに行っていました。

地名の由来 9

勝専寺(足立区千住2-11)の千手観音像は荒川から引きあげられ、「千住」の地名の由来となったと伝わります。徳川秀忠、家光、家綱などの将軍が鷹狩や日光への参拝の際に滞在するなど、由緒あるお寺です。



勝専寺の閻魔堂の閻魔王坐像。毎年1月15・16日、7月15・16日に開帳され、縁日で賑わう

10

横山家住宅

横山家は江戸時代から続く富裕な商家で、屋号を「松屋」といい、再生紙を取り扱う「地漉紙」問屋でした。宿場の伝馬(人や物資の輸送のために人馬を手配すること)も負担していました。こちらの建物(足立区千住4-28-1)は江戸後



左／横山家住宅(個人宅のため内部は非公開)。戸口は街道から一段下がっており、これは「上にいるお客様を下からお迎えする」心掛けの現れという 中／帳場には明治時代に人気のあった山岡鉄舟書の屏風なども残る(特別に許可を得て撮影) 右／敗走した彰義隊の隊員が横山家に立ち寄り、悔し紛れに柱に切りつけた跡(特別に許可を得て撮影)



モザイクの町 7

千住仲町(千住河原町の北隣)は豪商の町です。近代には呉服屋や銀行が並びました。やっちゃ場で商いをして農村に帰る人たちは、銀行で貯金をして帰ったそうです。「長谷川金物店」では、昔は農家の人が農具を買っていました。かつては床屋も多かったそうです。

長旅を終え、さあ江戸市中へ入るという手前で、身支度をきれいに整えたかったのでしょう。「ワカタ薬局」や川魚問屋の「鮒与」の店は、奥に蔵が残されています。こちら(左写真)のように、千住は新しいものと古いものがモザイクのように混在しているのが特徴です。

宿場の中心部 8

千住仲町と千住一丁目の境に、一里塚跡や高札場跡の石碑があります。その先の「東京芸術センター」(足立区千住1-4-1)が建つ場所には、1996年まで足立区役所がありました。さらに時代を遡れば、ここには千住宿の問屋場と貫目改所がありました。問屋場は人馬の手配をするところで、貫目改所は荷物の重量検査をするところでした。

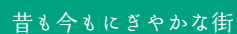
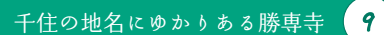


東京芸術センターの敷地には、問屋場や貫目改所の杭穴、礎石の位置、推定される範囲が線で示されている



千住宿
MAP

丸数字はP14~17の
スポットを表します



足立区立郷土博物館

美術博物館としてリニューアル



左／第一展示室に展示されている千住宿の精巧な模型 右／第一展示室の一角ではやっちゃん場の青物問屋の様子も再現

東京都足立区大谷田 5-20-1
TEL 03-3620-9393



街の風景を残したい。 古民家をリノベーション

「和食板垣」を開設 人が集まるスペースに

再開発が進む千住の町で、古民家を改装してカフェや料理店、和文文化体験教室、文化サロンなどを運営する取り組みが広がっている。そのうちのひとつが「和食板垣」だ。建物は元々、地元の名士・板垣信春氏が建てた日本家屋で、敷地は約一〇〇坪、築年数は八〇年を超える。数年前に居住者が亡くなり、買い手がなければ建物が取り壊される事態に。そこで手を挙げたのが、近

千住宿 瓦版



美術作品の常設展示

美術作品の常設展示 大規模改修で誕生

一九八六年に開館した足立区立郷土博物館は、これまで生活用具や歴史資料を中心に展示を行ってきた。二〇一二年の区制八〇周年を機に文化遺産調査を進めた結果、区内に多くの美術品が残されていることが明らかとなり、これらの文化遺産の適切な保管と展示を目的に大規模改修工事を実施。二〇二五年四月二六日にリニューアルオープンした。

本特集で見てきたように、足立の旧家には琳派をはじめとする江戸や明治期の文人たちの書画や歴史資料が伝来している。博物館ではこれらの調査研究を進め、その成果を反映した企画展を開催してきたが、今回の改修によって待望の常設展示を開始。美術作品をいつでも鑑賞できる環境が整った。美術館の要素を併せ持つ郷土博物館の誕生は全国的にも珍しい試み。二〇二五年は千住宿開宿四〇〇年の節目の年であるため、十月には千住宿をテーマとした特別展も予定している。

藤温思さんだ。

近藤さんの家業は旧日光街道沿いで江戸時代から続く葬儀社「溜屋 近藤商店」。子どもの頃から板垣邸のある風景に慣れ親しんできた近藤さんは、「絶対にこの建物を残したい」という想いから、購入を決意した。建物は耐震補強や床暖房を施し、知り合いの伝手を頼って料理人を募集。二〇二〇年に開店した。「近所の方が『子どもの頃、この家に遊びに来たことがあるよ』と懐かしんでくださった時は嬉しかったですね。和食板垣の隣には『TSUJI-辻』というかき氷屋を、中庭を挟んだ場所にはバーを造りました。千住の町もだんだんと人のつながりが希薄になってきたので、人が集まるコミュニティスペースとして活用していきたい」と話す。



東京都足立区千住 5-6-7
TEL 03-3888-3970
営 11:30 ~ 14:00
17:30 ~ 22:00
休 水曜日



初公開

勝専寺
千手観音立像
御前立

歌川広重
名所江戸百景 千住の大はし



千住宿模型



初公開

黒漆塗
仏二枚銅具足



千住宿伝馬割図



日光祭礼式絵巻

足立区立郷土博物館 特別展

千住宿 400年

2025年 10月21日 火

2026年 1月11日 日



掃部宿小型厨子

千住の地が宿場となった理由からその後の繁栄、教養豊かな商家を中心に宿場の人々が築いた独自の文化や、宿場の面影を残す現代の姿に至るまで、千住宿の400年をたどります。



ADACHI CITY MUSEUM
足立区立郷土博物館

東京都足立区大谷田五丁目20番1号 TEL 03-3620-9393

9:00 ~ 17:00 (入館は 16:30 まで)

休館日 月曜日 (月曜日が休日の場合は翌平日)、
年末年始 (12月29日 ~ 1月3日)

アクセス JR 亀有駅北口よりバス (詳細はホームページ)

